

「信仰盲」という分析概念は可能か

— 8 か国調査を踏まえての日本における宗教意識の考察 —

松野智章

本稿は、星川啓慈を代表とする科学研究費基盤（A）「生命主義と普遍宗教性による多元主義の展開—国際データによる理論と実証の結合—」でなされた8か国調査に対する理論研究としての考察である。本研究の概要に関しては、実証研究の成果として、社会学者の川端亮「宗教的信念における共通の因子—8か国調査の結果から—」（『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』42号、2016年）、「宗教性の測定における共通性—3回のインターネット調査の経緯」（『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』44号、2018年）や真鍋一史「「宗教性」の概念・測定・分析（Ⅰ）—「8か国における宗教意識調査」を事例として—」（『関西学院大学社会学部紀要』125号、2016年）、「「宗教性」の概念・測定・分析（Ⅱ）—「8か国における宗教意識調査」を事例として—」（『関西学院大学社会学部紀要』128号、2018年）に調査方法、調査結果の一部、ならびにその結論が述べられている。本稿では、上記の論文を踏まえ、どのような調査でどのような結果が得られたのか最低限、説明することから始めたい。

その上で、日本における調査結果が他国に比べ宗教信念要素度が低いことを確認し、この低さは何を表しているものかの分析を行う。その際、理論研究として、①自然宗教と創唱宗教の根本的な差異、②宗教概念批判、③言語哲学の議論を導入することで新たな知見を述べるものである。

1 宗教信念における8か国調査

宗教を計量研究で図ることに、宗教研究者の中には意義を見いだせない者もいるだろう。確かに、計量研究は、調査方法としてアンケートの回答を集計することで得られるものであり、そのアンケートの回答結果に個々人の宗教的な信念が反映されるか疑問である。特に、宗教的信念は、例えば病气などで死を意識するようになった時など、どこか人生の出来事で極限に追い詰められた時に心的現象として立ち現われてくるようなものかもしれないからである。そして、そのような心理状態を計量調査に反映させるのは難しいのも事実である。しかし、それは単なる研究の観点の違いであり、文学研究における普遍性の探求とは異なる、現在の社会の現状の中で一般的に宗教がどのように捉えられているのかという問題を知るには社会学の方法は有益である。また、宗教の捉え方にしても、見方を変えれば、そのような極限状態にある人だけが宗教を支えているという訳でもなく、宗

教の信者の多くはごくごく普通の人々であることに鑑みれば、計量研究にも十分意義はある。

8か国調査の方法に関しては川端(2016)・(2018)に纏められている。「調査は、インド、トルコ、日本、アメリカ、イタリア、台湾、タイ、ロシアを対象とし、調査会社を通してインターネット調査を実施した」ものである。2015年の調査であるが、調査対象は「20歳から59歳までの男女で、性別と年代を人口構成比に合わせて割り当てた」というものである。おおよそ各国ともに、20代、30代、40代、50代とそれぞれが25%に近づくように回収されている。ただし、インドとトルコは50代のインターネット人口が少なかったためかインドは20代が33%、30代が29%に対して50代が15%、トルコは20代、30代ともに31%に対して50代が11%と低い回収結果であった。対して男女比は均等に回収できている。また、インターネットの調査という性格上、回答者が「大幅に高学歴に偏っているという欠点は否めない」¹とある。したがって、調査対象者は、インターネットが使える世代で高学歴層が多い²。

次に、調査内容についてだが、本調査は宗教信念に関する構造的な分析を試みるもので、質問項目は、抽象度の高いものになっている。つまり、超越者についてなら、具体的に「神」でも「仏」のどちらでもよく、回答者が想定する任意の対象として質問している。つまり、特定の宗教を捨象し、宗教的な信念に対してのアンケート調査である。個人々の英語の理解度を量るのに TOEIC にあてだけの質問が必要なように、質問量が多ければ多い程良いのだが、回答者が回答できる分量を考慮し186項目とした。ただし、質問項目が多いため一人の回答者には3分の1の61項目と全員に共通の3項目を回答してもらった。2016年の調査では、さらに90項目に絞り同じ様な条件で全員に同じ質問を回答してもらっている。186項目の質問項目はここでは紙幅上紹介できないが、図1に取り上げた。

2 興味深い二つの結果

本調査がインターネットを使える高学歴を中心とした回答者の回答であることを踏まえたとしても、興味深い二つの結果が得られている。一つは、8か国の宗教信念が構造的に似通っている点である。もう一つは、8か国の中で日本だけが飛びぬけて「宗教熱心な国」³ではないという点である。しかし、本稿では、日本が宗教熱心ではない国だとしても通常とは異なる解釈を与えるのが目的である。

では、川端による Rasch 理論⁴による因子分析の結果を共有しておきたい。

図1 川端による18カ国の確証的因子分析の結果⁵

因子	因子負荷量	質問項目
I	0.785	「神」の愛を感じることに
	0.804	人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
	0.808	「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
	0.712	世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
	0.689	人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
II	0.708	信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
	0.724	「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行ったり捧げたりすることが必要だ。
	0.615	人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
	0.719	宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
	0.713	「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
	0.763	「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
III	0.602	執着がなければ、人は苦しみから解放される。
	0.75	ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
	0.571	利己心が、苦しみや不幸の原因である。
IV	0.524	「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
	0.526	目の前のものごとに注意を集中すること。
	0.663	あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
	0.667	自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
	0.588	他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
	0.474	瞑想（めいそう）をすること。

N=2,693

CFI : 0.949 RMSEA : 0.049

因子間の相関	
F1とF2	0.668
F1とF3	0.736
F1とF4	0.562
F2とF3	0.709
F2とF4	0.343
F3とF4	0.592

因子間の相関は、第2因子と第4因子の相関が0.3程度とそれほど高くないのに対し、その他の因子間の相関は、非常に高く、とくに第1因子と第2因子と第3因子は相互に強く関連しているといえるだろう⁶。

世界の代表的な宗教をかなり熱心に信仰している国7カ国と日本の、合わせて8カ国を対象に宗教的信念に関わる要素183項目を尋ねた。単純集計の結果では、各国によってその分布は大きく異なり、とくに日本は多くの項目に対して否定的な回答や「意味が理解できない」「どちらともいえない」という回答が多かった。その一部の61項目を分析した結果、8カ国においても確証的因子分析において、4因子構造が確証された。以上の結果から、宗教文化としてはかなり異なる国々においても、因子分析などの多変量解析の手法を用いれば、共通の因子を抽出できる可能性はあるのではないかと考えられる⁷。

ただし、上記の分析方法以外に、真鍋一史がGuttmanの「最少空間分析 (Smallest Space Analysis:SSA)」⁸を使って異なる分析結果を出している。

川端の「因子分析」の結果の「読み取り／解釈」では、質問諸項目の「個別的・具体的な内容」——具体的にいうならば、「神観念」「救済観」「苦悩観」「精神の安定」——というところに焦点が合わされたのに対して、筆者の「SSA」の結果の「読み取り／解釈」では、それら質問諸項目の「一般的・抽象的な性質」というところに光が当てられることになった。このことは、「技法」が異なれば、対象の違った「側面」が見えてくるということを示唆しているかもしれない⁹。

上述のデータ分析の結果と、その「読み取り／解釈」の試みをとおして、若干の修正を迫られることになった。それは、つぎの2点である。①この「8カ国における宗教意識調査」で捉えられているものは、人びとの「宗教性」そのものというよりも、「グローバル化」の進展する現代社会における人びとの「宗教的な観念・イメージ・意識」——具体的にいうならば、「そもそも宗教といったものは、かくかくしかじかのものである」といった観念・イメージ・意識——をも含むものなのではなかろうか、ということである。②同じく、「8カ国における宗教意識調査」で捉えられているものは、人びとの宗教的な観念・イメージ・意識の「諸要素」というよりも、そのような諸要素の相互間の意味連関の「構造」——質問諸項目の意味内容の「近接性」の視座からする「識別反応」の「構造」——の「共通性」といったものなのではなかろうか、ということである¹⁰。

宗教概念批判を踏まえれば、グローバル化された宗教のイメージと川端の想定する「宗教」にさほどの差異はないかもしれない。なぜなら、M・ミュラーが英国王立研究所で1870年に行った講演 Introduction to the Science of Religion 以降、また、近代国家誕生と共に文化闘争（文化戦争）をも経験する中で、キリスト教・仏教・イスラームと「宗教」という言葉で括られる概念が創出され、世界的に共有されるに至ったと考えることが出来るからである。つまり、8か国調査の結果は宗教概念が如何に世界的に共有されているかと捉えることも可能である。もちろん、そこに系譜学的批判ではなく普遍性を読み取ることもできるかもしれない。しかし、どちらにせよ8か国調査を通して共有された宗教概念があるらしいという確認が為されたことは本調査の大きな成果である。そうした中、8か国において同様の宗教信念が共有されていたとしても、日本だけは特別その意識が低いのである。

3 日本における信仰の有無

2015年の8か国調査の「あなたご自身のことについてお聞きします。あなた自身は、何か宗教を信仰していますか。」という質問に対する回答が図2である。

図2 国別の信仰の有無¹¹

		宗教を信仰している	宗教を信仰していない	合計
インド	度数	847	199	1046
	%	81.0%	19.0%	100.0%
トルコ	度数	962	132	1094
	%	87.9%	12.1%	100.0%
日本	度数	166	982	1148
	%	14.5%	85.5%	100.0%
アメリカ	度数	785	375	1160
	%	67.7%	32.3%	100.0%
イタリア	度数	827	412	1239
	%	66.7%	33.3%	100.0%
タイ	度数	1118	24	1142
	%	97.9%	2.1%	100.0%
台湾	度数	685	461	1146
	%	59.8%	40.2%	100.0%
ロシア	度数	789	307	1096
	%	72.0%	28.0%	100.0%
合計	度数	6179	2892	9071
	%	68.1%	31.9%	100.0%

「宗教を信仰している」と割合が日本だけ14.5%と他の国と比べて極端に低いことが分かる。

信仰の有無とともに、信仰ありの人には、どの宗教かを尋ね、信仰なしの人には「あなたが育った環境で、影響された宗教はありますか What religion, if any, were you raised in?」と尋ねた質問に対する答えでは、インドでは、ヒンドゥー教が76.7%、トルコでは、スンニが68.6%、日本では仏教33.1%、アメリカではカトリック24.1%、その他のキリスト教23.4%、バプティスト派10.3%、イタリアは、カトリック89.3%、タイは、上座部仏教45.4%、大乘仏教42.6%、台湾は、道教35.3%、仏教35.0%、ロシアはロシア正教会74.6%であり、それぞれの国はほぼ想定されたような主要な宗教をカバーするといえる。一方で影響された宗教も含めて「ない」と答えたのは、インドでは1.8%、トルコでは5.1%、日本は53.0%、アメリカは9.6%、イタリアは、1.9%、タイは0.5%、台湾は15.4%、ロシアは10.9%で、日本の53%という数値は飛び抜けて高く、日本以外の国は「宗教熱心な国」といってよいだろう¹²。

このような日本における信仰度の低さを表すデータはすでに確認できる。最近では、松島公望・川島大輔・西脇良編『宗教を心理学する—データから見えてくる日本人の宗教性』(2016)¹³や稲葉圭信「無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル」(2011)¹⁴などである。しかし、どの研究においても日本人が宗教と無縁とは結論づけていない。初詣・お盆・お墓参りなど身体感覚としての日本人の宗教意識は高く感じられている。このデータとのギャップを埋めるための研究はすでそれなりの幅を持っているように思われるが、本研究では、これに哲学的見解を加味したい。

4 自然宗教と創唱宗教

自然宗教と創唱宗教は、一般的な対語ではないかもしれない。通常、民族宗教と世界宗教の対語を用いるが、本稿では、あえて自然宗教と創唱宗教という用語を用いたい。確かに、自然宗教という用語は混乱を招き易い。というのも自然宗教は近代ヨーロッパにおける理神論を背景とした啓蒙主義者によるキリスト教を指すことに使われるのが一般的だからである。それに対して、本稿の自然宗教は、自然発生的に生じた宗教という意味である。とはいえ、民族宗教と世界宗教という用語も誤解を招く用語である。というのも民族宗教はともかく、世界宗教は教祖が存在し仮に信者が一人二人だけの新宗教でも本質的に世界宗教だからである。しかし、一般的に世界宗教とは世界的な展開を見せたキリスト教・仏教・イスラームを指すのであり、ローカルな新宗教を指して世界宗教とは言い難い。また、本稿の内容に即するなら、自然宗教と創唱宗教という用語の方が理解を助け

る。では何故、この区分が改めて必要なのか。それは、「宗教」と一般的に括っても本質的に異なる性格をもつ宗教が存在すると考えるからであり、この区分は未だに有効だからである。

宗教概念批判以降、自然宗教を「宗教」という言葉で表現する限界・無理解を宗教学は自覚するようになった。宗教概念批判が示す「宗教」のモデルとはキリスト教のプロテスタントであり、自然宗教と創唱宗教の区分で言えば創唱宗教にあたる。したがって、プロテスタントをモデルとした宗教概念が日本の神道や「葬式仏教」になじまないのである。では、自然宗教の対象はいかなるものであろうか。藤原聖子は、増澤知子『世界宗教の発明—ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説—』(2015)の解説の中で、民族宗教と世界宗教という区分について言及している。特に、興味を引くのは「解説者が最も驚いたのは、現在の「世界宗教」言説が、アメリカと日本では根本的なところで異なるということである。解説者は本書を読むことではじめて気づいたことだが、他の研究者にも知られていない盲点と思われる」と指摘をしていることについてである。

増澤氏によれば、アメリカでは二〇世紀半ば以降、学界でも一般社会でも「world religion」と言う語は「世界の（主要な）宗教」を意味するようになり、民族宗教と対語としての「世界宗教（普遍宗教）」としての用法は廃れた（これについては、前述のジョナサン・スミスも同様の認識である）。ところが日本では学界でも「世界宗教」「民族宗教」の分類はなお健在である¹⁵。

そして、日本の学界の状況に対して M. ヴェーバーの宗教論に言及し、世界宗教を「[現世拒否（否定）]の宗教類型に重なっている」と述べる。したがって、『宗教学辞典』（1973）でも紹介されているように、「ウェーバー（Weber, M.）は、仏教、キリスト教、イスラム教のほかに、儒教、ヒンドゥ教、ユダヤ教を、世界宗教に加えている」¹⁶なのであり、より広範囲なカテゴリーである。では、このカテゴリーの構成要素は何であろうか。

神道や古代ギリシャの宗教、あるいは民間信仰、先住民宗教と呼ばれてきたものは、「民族宗教」の語で括られていないとはいっても）「現世肯定」の宗教としてまとめられ、対比された。言うまでもなく、ウェーバーの社会学的視点にとって宗教に関して重要なのは、たんなる信者数の多寡ではなく、この現世に対する態度の違いである。彼の理論において神義論が重要な位置にあるのも、それが宗教の現世拒否的諸段階において大きな契機となるからにはかならない。ユダヤ教やヒンドゥ教は、分布形態は限定的だが、現世拒否的世界観をもち、神義論の代表的形態と彼がみなす預定説や業一輪廻説を生み出した宗教として、神道等よりもキリスト教、仏教とともに

類型化されている¹⁷。

ヒンドゥー教は神道と同じ多神教なので神道と同じカテゴリーに括りたくなるが、この二つの宗教は根本的に性格が異なる。ヒンドゥー教が「現世拒否的世界観」を持った宗教に分類されるのは、神道と異なり「より良い来世」や「解脱」を目標としているからである¹⁸。つまり、8か国調査の図2に照らし合わせれば、分布領域が民族のみである諸宗教の中であって自然宗教としての性格を持った宗教が存在する国は8か国の中では実は日本だけなのである。この点に注目するのであれば、神道のような自然宗教の宗教圏において、「世界宗教—民族宗教」という区分は機能しない。しかし、この区分は日本の特異性を考える上で重要な示唆となる。なぜなら、民族宗教というカテゴリーでは、インドや台湾も日本と同じとなるので、何故日本だけ著しく宗教度が低いのか説明できなくなるからである¹⁹。

5 創唱宗教とアンケート調査

アンケート調査では回答者において自覚されていたことが回答に反映されるのはいうまでもない。したがって、自覚と宗教の問題を考える上で、何故、創唱宗教が誕生するのかという哲学的理解は重要である。これは、ニーチェ＝永井均説が示唆に富む。永井の「ルサンチマンの哲学」を踏まえ「自然宗教—創唱宗教」理論を再考してみたい。

図3 自然宗教と創唱宗教

自然宗教	創唱宗教
民族宗教	世界宗教
民族単位で世界に分布	世界中の民族に広がる
民族共同体の宗教	個人を対象とする
性善説	性悪説
現世志向	現世否定
教団組織と社会は未分化	教団と社会は分化
選択の余地がない	信仰の選択は自由
政治と一致	政治から独立

自然宗教と創唱宗教は、本質的に異なる方向性を志向する。自然宗教は古代の人々の生活形式である。したがって、社会の向上を目指しはするが現世の否定はしない。あくまでも地球上で成功することが目的である。例えば、神道なら、日本を靖国（安らかな国）として修理固成を完成させることである。それに対し、創唱宗教は既存の社会の価値体系に対して、価値の転倒を図る。

マルクスを持ち出すまでもなく、どの社会も貧富の差を生み、社会的強者と社会的弱者をつくりだしてしまう。では、社会的弱者が勝つためにはどうしたら良いであろうか。それは、土俵、つまり勝つためのルールを変更してしまうことである。イエスは、貧しいものが天国に行けて、金持ちは針の穴を通るよりも天国に行くのは難しいといった。つまり、イエスの主張は社会的に負けながら勝つ方法と言える。これが、価値の転倒である。教祖の資質は、社会的弱者でありながら、なんとか勝ち組にまわりたいと願う精神的強者である。この現実世界では負けているように見えても死後の世界においては勝ち組になるという内容である。したがって、どの時代においても宗教はかならず誕生し続ける。なぜなら、社会的弱者は社会の中で必ず生み出されてしまうからであり、かつ、その中には必ず精神的強者が存在するからである。オウム真理教の教祖の麻原彰晃（松本智津夫）は、この典型的事例である。地下鉄サリン事件が宗教的なのは、その殺人（ポア）が一応、教義上、良かれと思って為されている点にある。オウムの信者によってポアされることはオウム真理教の教祖に帰依しない人生よりも「良い」人生と位置づけられるからである。オウム真理教は社会的弱者による暴力行為、つまりテロリズムに行きついてしまったが、社会的弱者による、もっとも簡単にできる勝者の表現は「憐み」や「同情」である。

キリスト教的ルサンチマンは、反感や憎悪をそのまま愛と同情にひっくり返すことによって復讐を行なう独特な装置なのです。この装置を使うと、憎むべき敵はそのまま「可哀そうな」人に転化します。だから、彼らの「愛」の本質は、実は「軽蔑」なのです²⁰。

図3では、人間理解として性善説一性悪説としているが、この用語は儒教のものであるが、本稿では孟子・荀子に準じた意味で使っていない。端的に、そのままの人間で肯定されるか、否定されるかの違いである。創唱宗教における人間観は、キリスト教であれ仏教であれ、救われなければならない存在として否定的に捉えられている。対して、自然宗教では人間が救済される必要がない。

ユダヤ教についても、もともとは自然宗教のようにカナンの地での繁栄を願っていたのであるが、それが叶わなくなったときに救世主（メシア／キリスト）が政治的な指導者から宗教的指導者へと変わった。ディアスポラと神の試練は一对である。聖書とはバビロン捕囚の最中にユダヤ人が自らのアイデンティティを維持するために転倒させた価値の創造が結実したものである。ユダヤ教に教祖は存在しないが、既存の価値体系（自然宗教）に対して、異なる価値体系を打ち立てる存在が教祖である。したがって、教祖とは既存の価値体系に対する挑戦者であり現存する社会を否定する。故に、現世拒否という括りになり、それらの宗教を創唱宗教の範疇とするのである。

創唱宗教の世界認識と自然宗教の世界認識は全く異なっている。故に、創唱宗教の特徴を理解することで自然宗教の特徴を際立たせることが出来る。それは、創唱宗教は既存の価値の転倒を狙うものである以上、主体的な意識、信仰を自覚する必要が生じる。対して、自然宗教はそのような主体性を持ち合わせていない。つまり、宗教意識のアンケート調査に、そもそも自然宗教は反映しにくいのである。神道に対しては儀礼宗教という言い方も存在するが見たままでひどく表層的である。そうではなく、自然宗教は自覚する必要もないほど内在化された価値体系になる。このことを理解するためにも自然宗教と創唱宗教の比較は意味を持つ。

6 自然宗教をどのように捉えるべきか。分析の道具としての「信仰盲」

「規則的に従うこと」と「規則に従っていると思うこと」との差異をウイトゲンシュタインは執拗に論じた。そして、『哲学探究』Ⅰ部の規則論がⅡ部のアスペクト盲の議論に繋がっているのは周知の事実である。ウイトゲンシュタインが述べたアスペクト盲とは、二通りの見方ができるだまし絵を見て、その変化の瞬間に気づけない人のことである。実際、アスペクトが変わる瞬間に気づくことが出来なくても困らなければ良いではないかという主張である。したがって、「盲」という字を使っているが、この議論の文脈ではネガティブな意味ではない。そして、ウイトゲンシュタインはアスペクト（ウイトゲンシュタイン全集では風景相）盲から意味盲という概念に繋げる。

この概念の重要さは、〈風景相を見る〉という概念と〈ある語の意味を体験する〉という概念との脈略のうちにある。なぜなら、われわれはこう問いたいからである、「ある語の意味を体験していない者には何が欠如しているのか」と²¹。

意味盲とは、その意味を知らなくても実践できる状態をさす。日本語の「が」と「は」の用法の違いを的確に理解していなくても多くの日本人が実践できているのと同様である。本稿では、この議論を自然宗教の問題に接続させて考えてみたい。つまり、信仰を自覚するものと自覚しないものの違いである。この後者を本稿では造語で「信仰盲」と命名したい。宗教体験を自覚できる人が、いわゆる回心を語れる人であり己の信仰を語れる人である。それに対し、こうした経験や体験を自覚できない／経験や体験がない人が、アスペクト盲や意味盲にあたる人であり、いわば「信仰盲」と言われるべき人になる。

ウイトゲンシュタインは、これらアスペクト盲や意味盲は、仮にアスペクト盲人や意味盲人であったとしても全く困らないとしている。永井均は『ウイトゲンシュタイン入門』の中で次のように紹介している。

広義の意味盲人は、表情盲でもあれば解釈盲でもある。それでも彼らは、なおいわば実践盲ではないのだ。われわれはみな、規則や意味を訓練によって体得させられ、それによって言語ゲームの実践者となる。情感や理屈はその上に成立する二次的なものでしかないだろう。つまり、われわれ自身もまた、実は究極的には意味盲的・相貌盲的な生を生きる、盲目的な実践者なのだ²²。

そのまま流用すれば、宗教においても宗教の実践があるだけで信仰の問題は二次的なものということになるが事はそう簡単ではなく、アスペクト盲／意味盲の議論はもう少し複雑である。先の永井の解説も決して永井の見解ではなく、あくまでもウイトゲンシュタインにおける入門書の記述であることに注意しつつ、この問題に対しての野矢茂樹の議論をpushしておきたい。なぜなら、野矢はウイトゲンシュタインとは異なる反対の結論を導き出しているからである。野矢によれば、意味盲は言語使用にとって決定的な規範性を失っているという。アスペクト盲と意味盲に関する野矢の考察が次の通りである。

例えば、われわれが遠目に蛇を見て、近寄ってよく見たらただの縄であったとしよう。そのときわれわれは、「なんだ、縄を蛇として見てしまったのか」と言う。では、アスペクト盲はどうか？ まったく先の議論と同じである。彼はまず蛇を見、ついで縄を見る。蛇は端的に縄に変身したのであり、それはもはや「見誤り」ではない。なるほど、われわれならば、それは「蛇として見誤った」のであるが、アスペクト盲は「正しく蛇を見た」のであり、「正しく縄を見た」のである。そのことは「アスペクト盲」という概念の帰結に他ならず、それゆえ「アスペクト盲の者が見誤りをした」という文は矛盾ないしカテゴリーミステイクを犯しているのである²³。

意味盲には「誤解」もなければ「計算違い」もない。だが、それに対して正しいとか誤りであるとかが言えないのであれば、意味盲に対しては「規則に従う」ということも意味もないのである²⁴。

意味盲による盲目的な言語使用は私的言語に他ならない²⁵

さらに、野矢は自ら反論を想定し答えを与える。

われわれが扱っていたのはけっして自閉的なひとりの意味盲ではなく、意味盲の集団であった。そして、その集団の誰もが、かく足並みを揃えて発話し応答しているのである。だが、そうであるならば、そのような『言語』はもはや『私的』とは言えない

いのではないだろうか。まさにそれは公共的に流通している『言語』ではあるまいか²⁶。

「一致」ということを「意味の一致」ととるならば、意味盲の者たちには「一致して」かく行なうこともない²⁷

しかし、この結論は、ワイトゲンシュタインが意味盲はたいしたことではないと言ったことにたいしての批判になっていても、意味盲の議論そのものを無力化しているとはいえない。単にクリプキ同様に言語の懐疑論を押し進めた結果に至っている。後は、その状況を受け入れるか否かが問われているだけである。ただ、本稿の提示したい「信仰盲」という問題ならどうであろうか。言語のような一致・不一致が問題になる領域ではない。むしろ、野矢の議論は対象を自然宗教にスライドさせてみるならば、自然宗教の内実を見事に表現していると言える。

創唱宗教においては、神学・教学・信仰告白・問答など信仰を表現し、それを検証するシステムが機能する。故に異端など一致・不一致が問題となる。当然、それらの行為には信仰の自覚が伴う。ところが、自然宗教は、「信仰盲」という状態で問題が生じない。当然、自然宗教には神学も教学も信仰告白も問答もない。一般的に神道は、言挙げをしないとされるが、言挙げをしないのではなく言挙げが無意味なのである。なぜなら、一致も不一致も問えないからである。以上のことから、「信仰盲」という概念は「自然宗教」を考察する上で適切なものと思われる。

まとめ

稲葉は日本の宗教を「無自覚の宗教性」と表現した。それは「無自覚に漠然と抱く自己を超えたものとのつながりの感覚と、先祖、神仏、世間に対して持つおかげ様の念」²⁸と定義されている。本稿では日本の宗教意識の具体的な議論を展開してはいない。ただ、おおそ自然宗教つまり既存の価値体系の具体的なサンプルとみることができる。ただし、これらが宗教的とされるのは宗教概念批判を踏まえるならば、近代以降の宗教概念を当て嵌めた後に得られる言い回しであることに注意は必要である。対して、「信仰盲」は、その言葉から信仰の確認が取れない状態を連想させるが、意味盲同様に信仰の有無とは別次元の空間を提供する用語である。誤解が生じないように補足しておくが、本稿では創唱宗教が長い歴史を経て自然宗教のような状態になっているという理解はない。なぜなら、創唱宗教の出自が既存の価値の転倒にあり、構造的に自覚が促されるからである²⁹。自然宗教と創唱宗教の構造の違いがアンケートの結果となって表れているとみるのが本稿の考察結果である。以上をもって8か国調査のデータの一つ、日本の宗教意識の著しい低さに対す

る哲学的考察としたい。

注

- 1 イタリアは、高等教育卒業・修了者は39%止まりであるが、ユネスコの大卒者に関するデータでは12.8%とあるので、割合として8か国調査の高学歴度が高いことが伺える。川端亮「宗教的信念における共通の因子—8か国調査の結果から—」(『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』42号、2016年)199頁。
- 2 同書197-198頁参照。
- 3 同書200頁において、日本以外の7か国を「宗教熱心な国」と述べている。
- 4 川端論文にはRasch理論についての説明はない。井沢廣行「Raschの理論と理念、及び、WrightのRasch測定の展開」(『流通科学大学論集—人間・社会・自然編—』第20巻第2号、2008年)に詳しい。
- 5 川端(2016)203頁。
- 6 同書204頁。
- 7 同書204頁。
- 8 真鍋一史「『宗教性』の概念・測定・分析—「8か国における宗教意識調査」を事例として—」(『関西学院大学社会学部紀要』125号、2016年)にSSAの説明が為されている。
- 9 真鍋一史「『宗教性』の概念・測定・分析(Ⅱ)—「8か国における宗教意識調査」を事例として—」(『関西学院大学社会学部紀要』128号、2018年)81頁。
- 10 同書81頁。
- 11 川端(2016)200頁。
- 12 同書(2016)200頁。
- 13 松島公望・川島大輔・西脇良編『宗教を心理学する—データから見えてくる日本人の宗教性』誠信書房、2016年。
- 14 稲葉圭信「無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル」(『宗教と社会貢献』1(1)、2011年)。
- 15 藤原聖子「解説」(増澤知子『世界宗教の発明—ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説—』みすず書房、2015年)459頁。
- 16 鈴木範久「世界宗教」(小口偉一、堀一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会、1973年)494頁。
- 17 藤原(2015)460頁。
- 18 ヒンドゥー教をはじめインド発祥の宗教は解脱を大きな目的としている。確かに、ヒンドゥー教は中世のバクティとタントリズムの隆盛によって、それまでとは異なる要素を併せ持つようになった。しかし、仮に解脱がこの現世で実現可能であったとしても現世否定である。なぜなら人が生まれながら「良い」存在ではなく解脱を必要とする存在であるということにおいて、この現前する現世を否定しているからである。
- 19 ただし、台湾の理解には注意が必要である。台湾は、儒教・道教の国であるが、世界宗教に位置づけられていても現世否定という訳ではない。したがって、より詳細な台湾に関する宗教思想の研究が必要である。
- 20 永井均『道徳は復讐である—ニーチェのルサンチマンの哲学—』河出書房新社、2009年(初版、1997年)、26頁。
- 21 ウイトゲンシュタイン(藤本隆志訳)『ウイトゲンシュタイン全集8』大修館書店、1976年、427頁。
- 22 永井均『ウイトゲンシュタイン入門』筑摩書房、1995年、190頁。
- 23 野矢茂樹「規則とアスペクト:『哲学探究』第Ⅱ部からの展開」(『北海道大学文学部紀要』36(2)、1988年)118-119頁。

- 24 同論文、126頁。
- 25 同論文、127頁。
- 26 同論文、127頁。
- 27 同論文、131頁。
- 28 稲葉（2011）15頁。
- 29 日本における「葬式仏教」に関しては例外的な事例と考えている。僧侶は除いて一般的な檀家の意識は仏教本来の思想と全く無縁である。

キーワード

8 か国調査、創唱宗教、自然宗教、アスペクト盲、宗教意識